

レジャー・レクリエーションの研究をめぐる動向と将来展望

企画のねらい

日本レジャー・レクリエーション学会の前身である日本レクリエーション学会が『レクリエーション学の方法』（ぎょうせい）を刊行したのは1987（昭和62）年のことである。書名の示すとおり、本書は「研究方法」すなわち「社会の動きと研究動向」「研究の視点」「研究の方法（研究手法）」などに焦点をあてた本格的な研究書であった。現場の技術や業務のノウハウを対象とした専門書（実務書）が多く出版される中で、研究を志す者のために研究方法を体系的にまとめた研究書が企画出版されたのは当時としては画期的なことであった。

レジャー・レクリエーションに関する研究活動は1964（昭和39）年のレクリエーション研究懇談会（翌1965年にレクリエーション研究会が発足）として始まるが、体育、セラピー、福祉、教育、造園、観光など様々な分野の研究者や担当者が集まって結成された、きわめて学際的な組織であった。さらに1971（昭和46）年には日本レクリエーション学会へと発展したが、特に1980年代からレクリエーション学の体系化に向けた専門分野別シンポジウムやシリーズ研究会が開催され、各研究分野の問題点や研究課題が整理された。レクリエーション学の方法はその成果として出版されたのである。

この一連の検討を経て、レクリエーション学の研究分野が「歴史と原論」「意識と行動」「活動とプログラム」「サービスと運営管理」「資源と空間」「政策と運動」という6つの領域に分けられた。この分類は現在の日本レジャー・レクリエーション学会の公式見解ではないが、ほぼこれを踏襲する形で運用されている。

こうしたレジャー・レクリエーション研究の流れを社会的・学問的背景を踏まえながら定期的にレビューし、さらに新しい時代を見据えた研究の課題や方法論を展望することは、学会に課せられた最も重要な使命と考える。

そんな中、第40回学会大会という節目の年に「日本レジャー・レクリエーション学会の歩み－1996～2010－」が発刊されることになり、前号の「歩み」の内容に加えて特別企画として「レジャー・レクリエーションの研究をめぐる動向と将来展望」をまとめることになった。（研究領域も『レクリエーション学の方法』の領域分類を参考に「医療と福祉」を加えて6領域としたが、これは学会の総意・公式見解ではない。）編集方針として、現在の学会理事を中心とする編集委員が各章（各領域）のまとめ役となり、なるべく多くの方々との協力のもとに執筆することを目指した。

内容としては、①各領域ごとのテーマに関わる背景と目的を説明し、②文献レビューの方法を解説し、③先行研究の特徴や動向を明らかにし、④今後の研究課題とその方法論を展望する、という構成を取っている。

本企画がレジャー・レクリエーション研究を志す若手研究者や学生の指南書となり、研究活動の更なる発展に繋がることを期待している。

「日本レジャー・レクリエーション学会の歩み－1996～2010－」

編集委員長 麻生 恵